

学校と地域を「つなぐ・つなげる・つながる」

奈良県立奈良情報商業高等学校

校長 吉田 浩一

1. はじめに

本校では、生徒の「望ましい勤労観・職業観の育成」をめざして、平成27年度より、校内に模擬株式会社たまつえが設立された。全校生徒や教職員が出資して、その資金を元手に販売実習を行い、年度末に決算書を作成し、利益の一部は次年度に繰り越し、残りは配当金として出資者に還元している。一昨年度から、活動の一部を部局（部活動）に変更し、活動範囲を広げて本校の実学教育を実践している。生徒開発商品『アロマプレート』を県内の道の駅に委託販売したり、アロマの香りが高齢者ケアに役立つことを知り、高齢者福祉施設にクリスマスプレゼントとして贈るなど、社会貢献も行ったりしている。中でも力を入れているのが地域活性化に向けた探究活動で、毎年新しい課題を設定し、地域と学校の連携・協働を実践している。



図1-1 左：アロマプレート、右：高齢者福祉施設訪問

2. 主題設定の理由

高等学校では、平成29年に新学習指導要領が告示された。新学習指導要領による授業づくりのキーワードは、資質・能力、主体的・対話的で深い学び、社会に開かれた教育課程、そしてカリキュラムマネジメントである。特に、「主体的・対話的で深い学び」については、校種を問わず、全国各地の学校において、日々様々な実践が行われている。また、新学習指導要領（2018）では、「学習内容を人生や社会のあり方と結びつけて深く理解し、これからの時代に求められる資質・能力を身につけ、生涯にわたって能動的に学び続けること」そのためには「主体的に学ぶことの意味と自分の人生

や社会のあり方を結びつけたり、多様な人との対話で考えを広げたり、各教科等で身につけた資質・能力を様々な課題の解決に生かすよう学びを深めること」が重要であると指摘している。このように、今後10年先を見通した新学習指導要領では、生徒たち一人ひとりがより良い人生を送るため、「主体的・対話的で深い学び」を通して、学習内容と社会をつなぐ視点が重要視されていることが分かる。

そこで、現在の学校教育の実態および商業科の特徴を踏まえ、学校の位置する奈良県桜井市を教材に学校と地域を「つなぐ・つなげる・つながる」教育活動を展開しようと考え、この主題を設定した。

3. 研究目標および仮説の設定

研究目標 生徒が自ら問いを立て、課題解決能力を身につける

仮説1
自らテーマを設定し、課題の解決策を提案する中で、**主体性**と**コミュニケーション能力**が身につく

仮説2
地域課題に取り組むことで、生徒に**郷土愛**が育まれ、**地域の方々**が本校の学びに協力・連携できる

4. 研究の軌跡

これまでの活動は、商品開発を行い、その商品を委託販売し、定期的な収入を得ていたが、生徒たち（部局たまつえの生徒）は、さらに活動を広げるために何かできないかと考えた。お客様の生の声を聞く機会がないことや、直接触れ合う機会がないことに物足りなさを感じていた生徒たちは、「お客様と直接触れ合いながら、地域に貢献したい！」と考えた。そのため、R-PDCAサイクル（R 現状分析→P 計画→D 実行→C 分析・考察→A 改善）によって、解決策を考えようと生徒たちの活動が始まった。

(1) 現状分析 (Research)

桜井市の現状分析を行うにあたり、経済産業省と内閣官房（まち・ひと・しごと創生本部事務局）が提供

¹ 生徒開発商品とは、「商品開発」の授業の一環で、あったらいいなと思う商品を生徒のアイデアで考え、それを実際に商品化したものである。生徒開発商品を製作するにあたって、原価の計算から販売単価までを生徒が考える。本校では、芳香剤やアロマプレートがある。

するRESAS（地域経済分析システム）²を活用し、地域課題の分析（図4-1）を始めた。

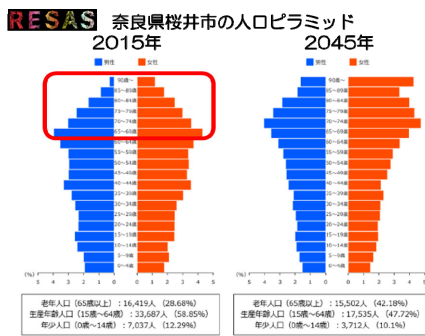


図4-1 桜井市の人口ピラミッド

その後、桜井駅南口の商店街にフィールドワークに出かけ、駅前商店街の実態を調査した。その結果、駅前商店街は、シャッター街と化していることが分かった。さらに都市再生推進法人桜井まちづくり株式会社を訪問し、社長の岡本様より、今、市をあげて桜井駅前広場から桜井市を活性化させようという取組が始まっていることを伺った。

(2) 企画と計画 (Plan)

これらの現状分析から、桜井市を活性化させるため、「桜井駅前広場で月に一度、販売機会を設け、駅前を賑やかにしたい。そして、地元商店街を含め、地域連携につなげたい。」と生徒から提案があり、「地域活性化のため、駅前に人を集めよう！」と目標を立てた。早速、市役所に出向き、担当の方と話し、桜井駅南口駅前広場で販売実習ができることとなった。



販売場所が決定したため、「誰に」「何を」「どのように」届けるかを定めるため、「マーケティング」の授業で学習したSTP分析³を実際に活用させ、授業で学んだことと実社会を「つなぐ」ことを意識した。

販売実習を行うにあたり、桜井市の実態を踏まえ、どのような商品を取り扱うのが良いか話し合い、高齢者が多いという実態、保存の利く商品などの案が出てきた。店舗名は、「たまつえマルシェ」と決まった。

(3) 実践 (Do)

2018年10月より「たまつえマルシェ」を、月1回

開催。それぞれの終了後、結果と反省について話し合った。



毎回の反省点と改善点を挙げる中で、次の2点が印象に残っている。1点目は、在庫管理もただ、数を数えて終わっていたが残数比較（図4-2）をして売れ筋商品を探し出し、お客様が今、どのようなことを望まれているのかということにも目を向けるようになったこと。具体的には、在庫チェックで動きのなかった商品にくじ引きの景品として提供したところ、非常に好評であったり、以前から要望の多かった野菜を提供してもらえる農家を探したりしたことである。

	10月	11月	12月	比較
総計	4.3%	30.0%	0.0%	↑
パン・和菓子	0.0%	0.0%	40.0%	↑
衣類	10.1%	78.8%	0.0%	↑
文具	0.0%	0.0%	74.0%	↑
玩具	60.0%	46.3%	60.0%	↑
加工食品	60.0%	0.0%	-	-
書籍	73.1%	63.7%	37.0%	↑
靴	-	30.0%	0.0%	↑
筆記用品	-	-	30.0%	↑
雑貨	22.0%	0.0%	-	-
文具・和菓子	17.8%	0.0%	38.7%	↑
地域産物	-	38.8%	32.3%	↑
調味料	73.1%	30.4%	0.0%	↑
マフラー	0.0%	24.4%	24.4%	↑
日用品	60.0%	71.3%	30.0%	↑
大衆食品	30.0%	48.0%	30.0%	↑
雑貨	30.0%	14.3%	24.3%	↑
その他	30.0%	0.0%	-	-
総計	55.2%	50.9%	54.4%	↑

図4-2 在庫残数比較

2点目は、チラシの工夫。情報を詰め込みがちになり、目立つようにカラフルなデザインにしていたが、アンケート調査から不評であることが分かった。そこで、委託販売でお世話になっているパソコン教室「ホエール」の社長に現在のチラシを見てもらい、どのようなチラシが集客に効果的かをご教授いただいた。このように、地域の方のご協力をいただく中で、地域とのつながりを生徒たちは肌で実感することができた。



図4-3 左：これまでのチラシ、右：アドバイス後のチラシ（4）分析 (check)

毎回のたまつえマルシェで集計したデータから読み取れることを、簿記や財務会計、原価計算の授業で習った知識をいかし財務分析（図4-4）を行った。そのうえで、専門分野の先生のご意見も伺った。また、情報処理の授業で学んだExcelも活用し、検定のための学習ではなく、実社会でいかに活用できるかということを念頭にデータをまとめた。座学での学びを実践の

² RESAS（地域経済分析システム）とは、人口動態や産業構造、人の流れなどの官民ビッグデータを集約し、可視化するシステムのこと。

³ STP分析とは、市場の細分化、市場標的の設定、自社商品の位置づけを通して、効果的な販売方法を模索するマーケティング手法のこと。

場につなげることで、実際に生きる学びとなっている。

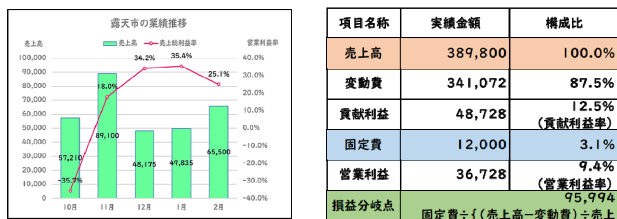


図4-4 左：たまつえマルシェの営業推移
右：直接原価計算による損益分岐点分析

(5) 考察（仮説の検証）

生徒の「地域活性化のため、駅前に人を集めよう！」という目標から始まった探究活動であった。この活動を通して、地域連携と協働が実現し、この取り組みを様々な授業の学びを活用してプレゼンテーションを作成し、発表することで主体性とコミュニケーション能力の育成につながったと考えられる。このことから、仮説1が立証できた。

また、市役所の担当者や桜井市のまちづくり株式会社の方など地域の大人との関係性を築き、小さい輪が広がり大きな輪へとつながっていることから、仮説2を立証することができた。授業ではない、正解のない自由な発想、対話が「生きた学び」につながっている。

5. 部局たまつえと課題研究を「つなげる」(Action)

これまで3年生で履修する「課題研究」の授業で課題を設定し取り組んでいたが、ただ単に「調べてまとめる」の調べ学習を少し膨らませた程度で終わっていることに物足りなさを感じていた。今回、部局たまつえの活動を通して、学習効果が非常に高く、これを課題研究の授業につなげることで、生徒が授業に対する取組に意欲や関心を持ち、自発的に取り組み、学習に深みが出るのではないかと考えた。

仮説の再構築

自ら考え、主体的に行動することで、従来の地域コミュニティの範囲を超えた、**新たなコミュニティ**が生まれ、**持続可能なまちづくり**を促進できる

6. 「課題研究」における実践と検証

情報ビジネス科の課題研究で「桜井をもっとメジャーに」を取り入れることにした。マインドマップで「桜井市の観光」「桜井市の産業」「桜井市の特産品」についてアイデアを書き出し(図6-1)、それぞれが興味を持ったことをさらに追究し、そこからビジネスアイデアを考え、各種コンテストに提案することにした。

コンテスト応募となると期限が具体的になるため、

生徒がいつまでにこれをするといった計画性も身に付けることができる。以下に、授業内で出てきたいくつかの事例を紹介する。

事例① 桜井市の観光アイデアを考えたグループは、『桜井を知るならまずここから～ビギナーズツアー～』と名付け、高校生の視点でプランを立て、バスツアーで開催した場合一人当たりいくらで実現できるかなど、これまでにない詳細なプランが完成した。

事例② 特産品のグループは『アルゴリズム(アルコール・リーズ)リサイクル』と名付け、桜井市は酒造り発祥の地というところに目を付け、酒粕の廃棄が多いことから再利用することを考えて、商品開発を行っている。

思った以上に生徒は地元桜井市のことをさまざまな視点から観察していた。高校生ならではの発想とアイデアでこれまで当たり前のように感じていた一つ一つの資源を「つなぐ」ことで、シナジー効果⁴を生み、新しい地域の財産を引き出した。これら一つ一つは、桜井市の未来へ「つなげて」いく可能性を残している。今後は、他のグループの発表や意見交換からさらに新たなアイデアに「つながる」ことを期待したい。

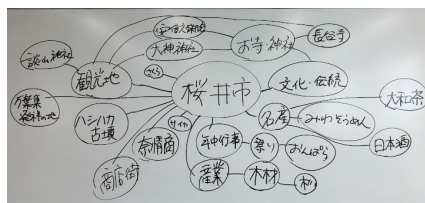


図6-1
マインドマップ

7. コロナ禍の取組と展望

(1) 取組

本年度、桜井市の地場産業である「木材」を使って「木のまち桜井」をアピールしようと『マイ箸プロジェクト』を企画し、幼稚園児や小学生とワークショップでマイ箸を作り、食育・木育の推進を行いながら、地元を知ってもらおうと準備を進めていた。しかし、新型コロナウイルス感染症が拡がり、本年度の『マイ箸プロジェクト』は来年度以降に持ち越すことになった。しかし、このまま1年を終えることはできないと『今だからこそできること』を話し合い、以下の2つを行った。1つは、『非接触グッズ Touch bear・wood-yan』の開発(図7)。クマの形をしており、足の

⁴ シナジー効果とは、相乗効果のことを意味する。1+1が2以上の効果を生むことを指す言葉。

部分でドアや扉に引っ掛け、直接触れずに開閉することができる。また、耳やしっぽの部分でエレベーターなどのタッチパネルを押すことができる。学校近くの木材商『山口裕康商店』より端材を提供して頂き、商品化した。

2つは、『フードドライブ』の開催。業務用や給食向けなどの食材が大量に行き場を失っていると聞き、食品ロス削減に取り組めないかと考えた。

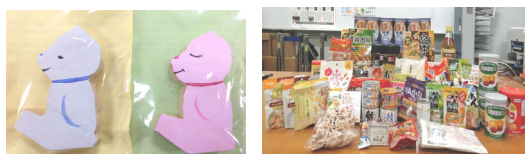


図7 左 非接触グッズ Touch bear・wood-yan
右 フードドライブで集まった食品(9/19分)

(2) 展望

木材を提供して頂いた山口裕康商店の社長が「みなさんと同様に、桜井を盛り上げたいというのは日々考えており、今後も全力でお手伝いします」と心強いお言葉をいただいた。同じ志を持つ同志がつながることで、さらに活動の幅が広がっている。また、たまつえマルシェとフードドライブを同時開催することにより、桜井市議会事務局や桜井市社会福祉協議会ともつながり、広報活動や食品の提供などで連携している。食品の保管や配送などの固定費が発生しないため、持続可能性が一気に高まり、SDGsの17の目標と数多く関連しつながっていることから、『もったいないが根付くまち』として、こども食堂など必要とされる関係各所ともつながり、拡げていきたいと考えている。



8. 成果と課題

(1) 成果

以下に、これまで記せなかったものを含めた昨年度の活動実績と受賞歴を記す。

【活動実績】

- ・桜井駅南口駅前広場にてたまつえマルシェを開催
- ・シェフェスタ 2019 奈良にて、委託販売先「かふえレストランさらい」さんと出店
- ・ソラほんまちフェスタ 2019 にて出店
- ・奈良県産業教育フェアにて研究発表と販売実習
- ・『桜井駅前ヒロバ整備・活性化構想』ワークショップ参加
- ・奈良情報商業高校LINEスタンプ開発

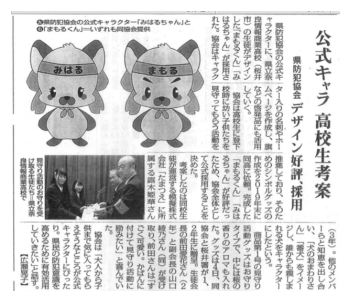
・奈良県防犯協会公式キャラクター考案

【受賞歴】

- ・奈良県生徒商業研究発表大会で最優秀賞を受賞し、2年連続近畿地区大会に出場
- ・地方創生☆政策アイデアコンテスト 近畿経済産業局長賞受賞
- ・第23回 ボランティア・スピリット・アワード 関西ブロック賞を受賞。全国大会に出場

【メディア関連】

- ・毎日新聞 (7/25・12/21・1/24・2/8・9/17) 掲載
- ・奈良新聞 (12/1) 掲載
- ・桜井市 広報 わかざくら (2020年6月号) 掲載



左・奈良新聞 (12/1) 掲載記事より

右・毎日新聞 (2/8) 掲載記事より

(2) 課題

探究活動を通して、私たち教員が心掛けていることは2つある。1つは「生徒の言葉を否定しない」こと。たくさん出た意見の中で使えるもの、出来そうなことが1つしかなかったとしても、高校生ならではの視点でアイデアを出し合うことが重要だと考えている。2つは「何事もまずは生徒自身にさせてみる」こと。外部との連絡や訪問も可能な限り生徒たちが行い、コミュニケーション能力が身につけばと考えている。また、自分たちで取り組んだことがたとえ失敗に終わったとしても、そこから何か大事な学びがあると考えている。「無理だと思うこと」「誰もやらないこと」をあえてテーマに選び、主体的に取り組む先に、深い学びと感動があるのではないだろうか。

9. おわりに

2019年5月1日、30年余り続いた「平成」が終わり、「令和」という新時代が幕を開けた。「令和」の典拠とされている万葉集が詠み始められたのは、桜井市。「今こそ、桜井をもっとメジャーに!!」を合言葉に、生徒たちが郷土愛を持った地域の担い手として活躍することで、地域力の向上につながることを期待している。

執筆責任者 教諭 足立 友美・教諭 岡田